



# お ち ほ

第23号 平成7年10月15日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 山下 陽一



## 湖畔学舎 初☆体験！

昨年までは、臨海学舎(たがらす)だったのですが、時間や寮生のことを考えて近場の方が良いのではないかと、ということで和邇浜(びわこ)に移動し、湖畔学舎に変わることになりました。今まで行きなれた場所から離れることもあって、心配と不安を胸に感じていましたが、その反面、ワクワクする気持ちもあり複雑な気持ちでした。そしてドキドキしながらいざ、和邇浜へ。一日目は、熱発を起こしてしまい、すぐにひきかえした寮生さんもいましたが、天気にも恵まれ、初日にはまあまあ。二日目は初企画の水上運動会。リレーをしたり、玉入れなどをして楽しく過ごしました。

石が多かったので足が痛く、水もあまりキレイとはいえませんでした。三日間ともいい天気にも恵まれ、ケガなく無事に終えることができ、ホッとひと安心。ただ、風がきつくて、夜のアトラクションや、花火が出来ず、何よりも全員参加できなかったのがとても残念でした。あつという間に過ぎたように感じた三日間でしたが、来年はどうなるのかな？



## クチナシのつづき

著 長 山 下 陽

あの日は、じめじめしていてもうとうと、天候もはつきりしない日が続いていました。

七月二日、月曜日の早朝、自宅の電話のベルが鳴りました。佐藤さんの緊迫感のこもった声でした。「朝方からすみません。恭三君の息がありません」という報告でした。救急車の出動は依頼したというのでした。私は何が起きてい

るのか、理解できぬまま、身仕度をして寮に向くと、グランドのB棟側に救急車のランプが回っていました。彼が使っている部屋に入ると、ゴム手袋の救急隊員による蘇生活動が行なわれていました。一人の隊員が心臓マッサージを行い、枕元の隊員はマスクを使って肺に酸素を吹き込む作業です。

「一、二、三、四、五」

「キュー、キュー」

「一、二、三、四、五」

「キュー、キュー」

心臓マッサージと酸素吸入が規

則的に繰り返され続けていました。

てんかん発作の硬直時そのままの姿勢なのでしょう。右腕は上に伸び、両足は爪先まで緊張し伸びきっていました。硬直した足に触れてみると、パイプ椅子のように冷たいのです。

恭三君、享年三十五、落穂寮に入所してちょうど二十九年目になった時でした。

彼は、生来非常に強い「てんかん」があり、健康な人が彼の飲んでいる一服を服用すると一日中強いはきけや、深いねむけがする程の抗てんかん薬を毎食後服薬しておりました。おそらく生涯、身体全体がけだるく、意識がボンヤリした気分だったのではなかったかと思えます。

しかし、気分の良い時はよく歌を唱ってくれました。中でも十八番は、「潮来笠」で、自分でチャ

ンカチャンカ」伴奏を付けながら唱ってくれ、歌合戦では喝采を受けたものでした。

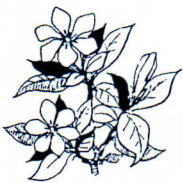
施設の集団生活では、寮生達から寮生達へ、「ことば」や「しぐさ」が真似されて引き継がれることがよくあります。恭三君のサインもそのようでした。掌を見せて、そこを人指し指でトントンと打ち、「帰省まであと何日か」と職員顔を見つめながらするのです。

入所生活を送る寮生にとって何よりの楽しみである帰省を、十分にことばでいい表せない気持ち、こんな方法で表現していました。なんともいじらしいではありませんか。そのサインが、寮の小さい子どもに伝ってきているようです。将来に渡り、ことばの少ない、寮生達の気持ちの表現の方法として引き継がれて行くのではないかと思えます。

恭三君に限ったことではありま

せんが、入所生達にとっては一番の楽しみは帰省です。職員が帰省日を知らせる前に彼らは知っているらしいのです。彼らにはカレンダーの概念は理解できないはずなのですが、よく知っています。おそらく、それが寮内で行なわれる行事が次の帰省日の目印になっていて、たとえば「キャンプが終了後しばらくすると家に帰れるぞ」という具合でしょうか。

帰省日を首を長くして待っているにもかかわらず、ご家庭の状況が少しづつ変わってきたのでしょうか、他からもよく聞きますが、帰省できない寮生や、帰省期間が短くなった寮生が次第に増加しています。おそらく、ご家庭それぞれに相当な理由があることだと思います。帰省日に親御さんと一緒に帰省している様子を見ている、帰省できない寮生は、どれほどの思いでいるか、察していただきたいのです。忙しさの中に少しの間を切り裂いて、家族での共の生活を味わせてやっていただきたいと思えます。





## 天に招かれた天才芸術家

## 今西恭三さん さようなら



故・今西恭三氏

平成7年7月2日、早朝、今西恭三さんは帰らぬ人となってしまいました。幼い頃より、彼を苦しめ続けていた、てんかん発作が、彼の命を奪ってしまったのです。

今西恭三さんは、昭和34年8月28日生まれ、36歳でした。昭和41年7月1日に落穂寮に入寮以来、30年近くの年数を落穂寮で過ごして来ました。人生の大半を落穂寮で過ごし、人生の最期もまた、落穂寮で迎える事となってしまったのです。

今西さんと言えば、食堂やお風呂で歌っていた、あの歌声がすぐに思い出されます。レパートリー

はとても広く、「青い山脈」「潮来笠」「お嫁においで」そして童謡、次から次へと歌ってくれ、わたしたちを喜ばせた後に、自分で「上手やな」と言っては拍手をしていました。間奏や前奏も自分でこなして、時には踊りまでつけてくれ、わたしたちもつい楽しくてよくアンコールをしたものでした。最近では、昨年の学習発表会

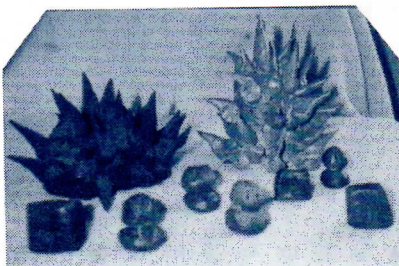
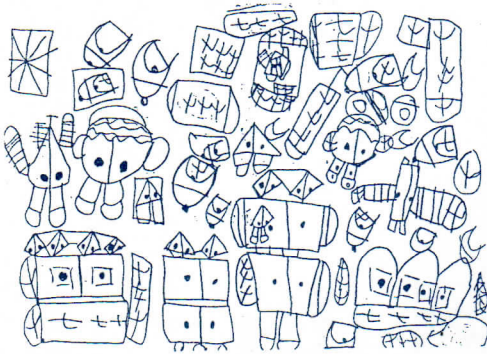
で、得意の「スターダ節」を披露してくれ、会場の拍手喝采を受け、うれしそうに跳びはねながら踊っていた姿が思い出されます。

今西さんはまた、とても素敵な芸術家でした。紙を見つけると、職員にマジックやボールペンを要求してきて、紙一杯に彼独特の線画を描き込んでいました。その絵には一つ一つ「道子さん(彼の母親)」「京阪電車」「ガソリンスタンド」など、彼なりの意味づけがされており、その絵を見るたびにうれしくなったものです。よく職員にも描いてくれと、紙とボールペンを持ってきて、こちらが「何描くの?」と尋ねると、「NHK」「和歌山」など、どう描いたらいいのか解らないものばかりで、困らされたものでした。それでも描くと、しかたないといった表情で持って行っていました。

今思うとあれは、職員の芸術的センスを試していたのではないかと

思われます。粘土でも、トゲのいっぱいついたような作品や、小さな顔の彼曰く「道子さん」を、たくさん作っていました。

今西さんは、何事にも束縛されない自由人だったように思っています。好きなときに好きな作業をして、休みたいときには自由に休む。きっと彼は、天国で絵を描いたり、歌を歌ったり、粘土をこねたりしながら、自由気ままにすごしていることでしょう。彼の歌声や、素敵な笑顔を思い出しながら、ご冥福をお祈りいたします。合掌。





# 雑感

三雲實業学校  
教諭 宇野正信

「落穂の成人化について何か書いてほしい」と、太田先生から依頼を仰け、結構ですとは言つたもの、何について書いても構はずらうものか、頭を痛めて書いています。

私は、東寺分校時代に就職し、途中三年間の中抜けはあったものの、現在までほとんど三雲実業学校に勤務して、落穂寮と係わりを持たせていただき、開かれた成人施設について思うところを書かせていただきます。

最近の高等部卒業生の進路の状況を見みると、生徒の持つ力のこととありますが、かなり数少ないものがあります。企業は不況や円高のあり方をもちに受け、作業所はもはや満杯の状態。高等部を卒業して行くところが、生徒がいつ出ても不思議でない状況です。そんな中で、学校でも地域に療育や就労の場作りを頑張ろうと、保護者の方々と動き始めています。

話し合いに参加した職員は一年ごと少しづつは変りましたが、しかし数々の具体的に出来た問題でも、全て「縮小化」しているのが、現実となりました。私は、この成人施設化という言葉を聞かたびにむなしさだけが残ります。この成人施設化という大きな問題の中で、何が一番欠けているのか？問におさる必要を感じます。

この春、杉山寮が閉寮しました。この件についても同じ木の会で、先に成人化を唱へ初めたはずの落穂寮の関係者には、何となく説明もななく、なぜ先に杉山寮を建てたのか？「？」だけが私の心の中心に、納め出来ぬまま、うずまき日々です。先日も哀しいことに今西君が補らぬ人となりました。寮生の生活を考えますと、一刻も早く成人施設化に伴う補給と看護婦さんをお願いします。日々、若い職員達が勉強しつつ懸命になつて寮生と共に生きていくのを案を思つても、成人施設化を望みます。もちろん、職員は成人化に向けての教育は大切だと思ひます。又寮生の父母、職員に対し

地域にそいつた場ができること、生活は家庭で、そして昼間は福祉的就労（もちろん企業に就労もできれば言うことはないのですが……）やグループホームでの生活も考えられるでしょう。どちらにしても一人ひとりが選択できる幅が多ければ多いほど良いのはいつまでも

である。そういつた観点から考えると、落穂寮が成人施設になれば、高等部卒業後の進路の一つに成り得ることもありますが、全く問題を感じないこともありません。

例えば、本末を變な地域の生活が基本で、やむを得ない場合は地域からならぬ施設に入所、という形勢を取られることになるので、施設に入っている人達がいずれだけ地域に根ざして行けるか、そのことが常に考えられた施設であつてほしいと思います。

また、基本理念を持つての施設運営ですが、理想のことになると思ひますが、一般の人々にとのようには知らせていくのか、開かれた施設がなされていくのか、そういつたことを、一地域住民として

は気になるところです。入所者の生活年齢が上がつてきてくる現状の中、施設としても、将来構想をしっかりとし、そして経営されていかれることを強く

念じて感じています。失礼なことでも多々書かせていただいたことをお許し下さい。

でも何か少しは成人施設化にむけて、何となく具体的に進んでいるか、難問の資金の事も全てオープンにしてゆかねければ、前進はないのではないのでしょうか。一日でも早く「寮生の父母」「職員」今でこそ落穂寮にかかわつて来た人達の御力も借りて、具体的な見直しある話し合いと努力を願つてはもらせません。

# Dream Come True 成人施設化を考える

## 「成人化施設を考える」 そのかわりに

保母 西村明子

初めこのタイトル「成人化施設を考える」とは関係のないような話かと思はせていただきました。もう十数年前のことになりましたが、私が短大生のご見学実習で重慶市障害者施設に行った時で、その時、聴いた話ですが、私はその施設に入つてギョツとした。そこで生活しているらしい人たちは、見れば大人なのにその行動がその時の私には信じられないものだったのです。しかもそこにおられた職員の方は、その人たちに

普通で当たりに前に声をかけたが、お世話を受けていました。ショックで言葉が出ない私はあまりにも対象的にその人たちの世界は流れていました。そして種施設への本格的な実習があり、直接知的ハンディキャップを持つ人たちがかわるこことになりました。共に生活することで表はれ違ひはあれ、私たちと変わらぬというものがわかつたところでうれし実習でした。知的ハンディキャップを持つ

## 日常の中で！！

一九九五年八月吉日  
調理員 箕口百合子

朝六時半、落穂寮の坂を朝の清風をうけながらバイクで駆けおぼり、出逢う職員・寮生達におはようの挨拶を最後に、調理場の仕事をはじめます。御飯のスイッチ、水をはった大釜に点火、味噌汁つくり、弁当作り、これが早出の仕事です。私がこの落穂寮に勤めから、職員・寮生は、いろいろ変わりましたが、これらの朝の段取りは、何一つ変る事なく変わらずつづけて来た。又これからも、続けてゆく仕事です。そして時間と共に、序々に活気づく寮生の声、毎日のくり返しですが昨日も日も無事ですべてゆき、又新しい朝が迎えらるるといつ安心感。これが私の長年経験してきた深い実感なので、成人施設化を落穂寮が言い出したのは五年も前のことです。設計する前にあたり、寮生にとつての様々な問題をおさくまで、何回となく討議してきました。

人だから、その対応は自問と呼ぶた人だから、人の強い人は必要性が出てきていますが、根本的には、普通に声をかけ、かかわることは、普通でしか、かかわると思つていません。「普通」というのは簡単なようでとても難しい愛情のこもった行為だと思ひます。タイトルから少々ずれました。成人化を考える上で私が何を思つかすかというと、知的ハンディキャップを持つ人たちに、一人格者として丁寧に援助させてもらいたいことです。成人だから丁寧というわけではありませんが、やまやま私には、謙虚さを忘るがちなになります。「忙しくて、時間になつて対応が忙になる。いつも反省の時に言う言葉です。そここのろの自分を乗り越えられるように自分を磨くことだと思ひます。またまた成人化に向けて配慮しななければならぬところはあると思いますが、「かかわり」について私にもなる考えを書かせていただきました。





# さあ、友達になろう

石部南小学校四年二組

先日、七月八日(土)に、南小学校四年二組(前山先生担任)のお友達が、落穂寮に遊びに来てくれました。受け入れる方が慣れていなかったもので、楽しんでもらえたのか心配でしたが、その後の感想を拝読して、少し胸を撫でおろしている次第です。今回は、その中から、いくつかを紹介したいと思います。

## お友達より

佐藤和美

「ブーン、ブーン、ブーン。」  
あ、四十四さいのおじいちゃんやで。と言ってみんなのところへ行った。みんな初めて会うのに、えがおでむかえてくれた。  
みんな一人一人、足がふじゆうな人目のふじゆうな人といろいろあるけど、みんなえがおは、やさしいえがお。人の中には、この人へんとか自分のことしか考えない人がいるけど言われた人の心はど

んなにいたむか。自分がもし、その言われた人だったらどんなにいやか。けどわたしは、みんないっつも楽しいって言うかおがすこし見えてきました。

「これからも、楽しくくらしして下さい。」  
それから、カレーとつてもおいしかったですよ。じゃあまたみなさんの所へ行きます。「まっててね。」じゃあ、「さようなら。」

まつ下 ゆかり

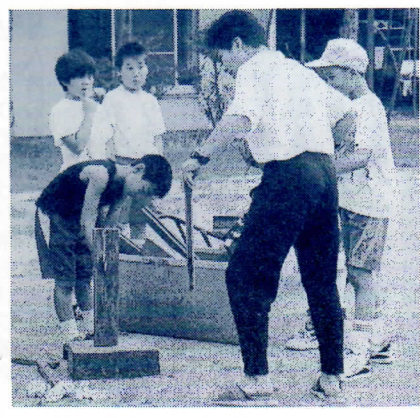
この前は、ほんとうに、ありがとうございました。私たちは、ただで、カレーを食べて、あそんで、私は、ほんとう行っていいのかなーと思っていました。でもその日あたたかく私たちが、むかえてくれた。私は、ドキドキせずしていました。みんなもだいぶなれたのか私たちに、話してきてくれました。私もなれてきました。すると、先生がこう言った。「じゃがいもを、きる人。にんじんを、きる人。たまねぎを、きる人。」と言った。

私は、心の中で「じゃがいもを切るぞー」と思った。私は、そーとかずに聞いた。「なあじゃがいもを、いっしょにきろうさー」と言った。するとかすは「うん」と言った。あんなに、楽しいことは、ひさしぶりです。これからも、あのぼしよに、あそびに行くと思えます。また、そんな日があつたら、さそって下さい。ほんとうに、ありがとう。

ますだ りな

わたしは落ちほりよりに行くときいてうれしかったです。なぜかとゆうとわたしはふじゆうな人を見るときともかなしくなるのです。カレーづくり、たまねぎ、にんじん、じゃがいものかわむき、むずかしかったね。じょうずにきったね、わたしはかわむきへたっぴんだったけど、じゃがいも、にんじんきるのすーごくうまかったね。ドッチボールもたのしかったね、カレーもおいしかったね、すごくおいしかったね。だつてみんなでつくったから、それほどおいしいんだね。みなさんはみんな男の子も女の子もいっしょにあそんで仲がいいですね。わたしたちは男は男でサッカーとかして女の子は女

の子でてつぼうわたりぼう、そのほかいろいろであまり女の子と男の子ではいっしょにあそびません。でも落ちほりよりのひとたちをみてわかりました。みんななかよく笑つてあそぶ、ひとりぼっちでいたらさそってあげたりしますね。みなさんいつまでもなかよくしてください。



よしだ あい

おちほりよりのみなさん。こないだの土曜日はありがとうございました。おちほりよりの人や、おちほりよりにきた人といっしょに作ったカレーライスはおいしかったです。  
わたしは、にんじんを切つただよ。おちほりよりの人にはにんじんを切つた人はいますか？まだ、



にんじん切りだけじゃなくて、たまねぎや木を切る人やまぜる人ももいたね。でも、おちほりようの人は、言葉はつうじないようです。心がつうじると、わたしは、そう思いました。でも、わたしだけがそう思っただけじゃありません。でも、先生や4年2組のクラスの人でも、わたしより小さい子が、

「あの人へんな人やなあー」と思うっている人もいます。わたしは、そんなことはいけません。お母さんのおなかの中にいたときからだと分かります。おちほりようの人はわたしよりちよつと年上ですが土曜日から友だちだよ。わたしにとつてはやさしい友だちですよ。なんで土曜日から友だちだつていうと、ドッジボールもしたしカレーライスいっしょにたべたからです。そんなカレーライスやドッジボールをしたことをわすれないでください。

## 保護者より

丹 みゆき

先日は、寮長先生、諸先生方、落穂寮のみなさん、お忙しい中又暑い中で、快く迎えてくださりあ

りがとうございました。

大鍋にゴロンとでかいジャガイモ、八角三角、挙句の果てはスライスジャガイモ等々、ごちやごちやと楽しそうに色々入りました。カレー粉も入りました。マントラカレー!

広場で机を並べ、このマントラカレーを頬張っている光景、  
「あーいいなあー」一緒に生きていると言う事…この様でありたいと願いました。

子供達が、大人になった時、また、道に迷ったとき、今日の事が何かヒントを与えてくれたらと考えています。

落穂のみなさんからは、素晴らしい日を頂きました。さて、私たちは何かお返しが出来ましたでしょうか。疲れだけを置き土産したような気がしてなりません。本当に今日は、ありがとうございました。

井川 政子

先日は、子供達に、落穂寮の皆様と、ふれあう機会をくださり、ありがとうございます。

私ごとですが、石部に来まして二年、この度初めて落穂寮を知りました。家の近くにもみじ寮、あざみ寮がありますが、おまつりで

交流があるくらいでした。私たちにとつてよい機会をいただいたと思っております。

親の気持ちとは別に、子供達はサッカーなど自分達の遊びで夢中でしたが、家と落穂寮のお友達、諸先生、ボランティアの方々の事を話しますと、息子も真剣に聞いてくれました。年令的に同じ年頃ですと、もつと自然に仲間意識がもてたのかもしれない。

子供達が、「落穂寮にいつてくる。」、「いつてらっしゃい。」が、日常の会話でもてるように、地域と落穂寮が密着した関係であつてほしいと思えました。また、何らかの形でお会いできるのを楽しみにしております。



先日は楽しいひとときを過ごさせて頂き有り難うございました。前山先生にこういふ機会を作つていただいて、初めて皆さんとお会いする事ができました。大きな鍋でカレーを煮込みながら先生方とお話する事もできました。でも残念だった事があります。せっかくのふれあいも、南小の子供達だけで遊んでいた事です。初めてと言う事で子供達もどうしていいのかわからなかったのでしょうか、ゲーム等でもしてもつと皆さんとお友達になれたら良かったのと思えます。それと後片付けができませんでした。全部、先生方や大人に任せきりで、ちよつと腹立たしかったのですが、帰る際に、先生方が「是非、又、来て下さい」とおっしゃって下さった言葉に、今日のような日が過ごせた事が本当に良かったと感じて下さっているように取れたのは、私の勝手な解釈でしょうか。せっかくの出会いが、この一回限りで終わらないように、又の機会を楽しみにしています。

今度は、一人でも名前を覚えて帰りたいなあと思つています。最後になりましたが、私は山本と言います。あの日は、確か茶色のTシャツを着ていました。誰か覚えてくれるかな。



# 担任より

石部南小学校 前山 茂治

「落穂を六十キロ集めて、〇〇へ寄付します。」

あれは私が小学校六年の時だったろうか、給食時間に校内放送として流れていたのを教師になって思い出したのだ。

機械化されたものずいぶんお米が落ちていたが、農家の人々は拾う事もしなくなった。この捨てられて焼かれてしまうお米を何とか拾って、人々に役立つことはいだらうかと子供達に呼び掛け拾い集めることにした。

興味を持ち、たくさんの落穂を見付け、まるで宝の山を発見したかのように嬉しく思った子供もいた。みんなが苦勞して集めた落穂が白米にして六十キロを越えたと喜びもあつた。

落穂に届けて十数年、一年に一度私のクラスの子供達は、落穂の子供とサッカーやドッジボールをして遊んだ。どうして良いか分からずただぼんやりしていた子や戸惑っている子もいた。しかし、この出会いの中から何かを感じ学んだに違いない。自分が感じたま

行動する中で、きつと自分に持ち合わせていないものを発見し、これではいけないのだという新しい価値観を得たのではないかと思う。誘ってや。」  
何年にも渡ってこうした交流の場を快く理解して下さった寮長さん



## カレー!!おいしかったね!

それが次ぎの行動を起こすステップになれば嬉しい。  
高校生になって、  
「先生、落穂寮に行くんやったら  
んをはじめ職員の方々に大変感謝  
してします。今後ともよろしくお  
願い致します。」

# 泉

▽前号に引き続き、今回、初めてお目にかかる方もおられる事と思います。前回よりも、更に多くの方に落穂寮を知って頂きたいと思いい、皆様のお手元に参上致しました。相変わらずのド素人の編集で読みづらいと思いますが、一読して頂けたらと思います。

皆様の御意見・御感想・叱責・苦情等がありましたら、どしどし御連絡下さい。

▽石部中学校との交流会の後、石部南小学校四年二組のお友達との交流会が行なわれました。どちら相手側からの申し入れで実現する形のものでした。更には、拡大交流という形での、石中の人達との交流も企画されました。

私達、施設職員には、課題のひとつとして、地域に開かれた施設というのがあります。しかし、職員自身が慎重になりすぎているところがあり、消極的な取り組みもできていないように思います。

この機関誌と同様、これを機会に、できるだけ、皆さんに知ってもらいたいと願う**オチホ**です。  
(木言)